

G
U
C
C
H
I
S

青春映画学園祭
『ビヨンド・クルーレス』

山崎まどか×長谷川町蔵
トークショー

補講ノート



山崎：山崎と申します。よろしくお願ひ致します。

長谷川：長谷川です。よろしくお願ひします。まず『ビヨンド・クルーレス』の話をする前に、会場みなさんに質問したいと思ひます。年代を聞いてみないと話がわけわからなくなるんじゃないかと思ひまして。挙手でお願ひします。この中で10代の方？

長谷川&山崎：あ、少しいた。うれしい。

山崎：20代の方？

長谷川&山崎：あ、多い。

山崎：30代は？

山崎&長谷川：まあまあ多い。

山崎：40代の方？

山崎：ありがとうございます。20代が一番多いということで、ということはきつと、今見た『ビヨンド・クルーレス』で扱われていた映画は、リアルタイムでは見ていないってことですよ。

長谷川：20代の方は、『ビヨンド・クルーレス』の中で紹介された映画って見てます？ まあ当然 DVD とかですけど。

山崎：『クルーレス』を見たことがあるって人は？

山崎&長谷川：半分くらい。

長谷川：さすがに、多いですね。

山崎：『スクリーム』を見てる人は？……それなりにいるのか。『バブル・ボーイ』を見たって方は？……何人かいる。

長谷川&山崎：すごいですね（笑）。

山崎：『バブル・ボーイ』はVHSがもうたぶん手に入りにくいので、猛者ですね。

長谷川：劇場公開もされてなかったんだっけ？

山崎：されてないです。

長谷川：なにを話したかったっていうと、この『ビヨンド・クルーレス』の監督自体が、まだ20代ということで、20代なりのティーンエイジ・ムービー解釈がされているのが、すごい面白いなと思っただけです。僕はこの映画で紹介されていたような映画を見てた頃には、ぶっちゃけもう30代だったので（笑）、そのズレがすごい面白かったな、と思ひました。

山崎：そうですね。でも彼（監督）にとっては、すごい発見だったはず。

長谷川：そうそう。リアルタイムで見てない分、なおさらね。

山崎：だから彼自身が、発見していったっていう喜びをものすごく感じる映画。監督はイギリス人なんですね。私たちはたぶん、『ビヨンド・クルーレス』で紹介されていた映画は、恐ろしいことにほとんどリアルタイムで見てる。

長谷川：10年前に『ハイスクール U.S.A アメリカ学園映画のすべて』（長谷川町蔵・山崎まどか著 国書刊行社）という本を出したんですけど、この本のサブタイトルに「アメリカ学園映画のすべて」と書いてしまったがために、全部見ざるをえなかったっていう経緯があったんですよ。

山崎：この映画を見ても、思うことなんですけど、ティーンムービーを200本集めているっていうことで、これは私自身の言葉じゃなくて、最近、読んだ本の中にあっただ言葉がピッタリだなんて思ひました。なにかのジャンルに夢中になった人特有の知識のひけらかしがすごい。

長谷川：まあ愛すべきものではありませんけど。年取ってやったら醜いんですけど、若い人がやるとまだ愛嬌になる（笑）

山崎：でも『ハイスクール U.S.A』もちょっと似たところがあって、なにせ当時はまだ「学園映画」っていうものがこんな風に語られてはいなかったの。

長谷川：たしかに、なかったですよ。

山崎：それこそ私たちも「こういう法則があっ、こういうところがジャンル化してて」って、ジャンルの勃興を見たようなものだった。

長谷川：そうそう。

山崎：自分たちが見つけた、パイオニアだっっていう想いがあった。アメリカ本国ではそういう風にまとめて語られていなかったの、『ハイスクール U.S.A』を書いた頃は、気がいさぐさくて。読者に「あの映画がなかった」って言われたくなかったんですよ。

会場：笑

山崎：本当に（笑）。で、しかもみんな全部見ていて「そこがない」っていうんじゃない、たまたま自分が見ていた映画がなかったっていうのが……

長谷川：しかもね、それが厳密に言うと学園映画じゃなかったりするんだよね（笑）。

山崎：そう（笑）。それを言われるとムかつくという一心で、相当端の作品までギューギューに押し込んだっていうのはあります（笑）。

長谷川：ただ、ここでは隠れた作品として語られている“Slap Her She's French”っていう作品はちゃんと見てますからね。

山崎：そう、だからパッと見て、20代の人にはわからないと思うんですけど、30代の人にはわかるかもしれないところは、

今回の『ビヨンド・クルーレス』で一番フィーチャーされている作品というのは、この時期の学園映画の中でも、マイナーなもの、決してのちに語られないものっていう作品を中心に押し出しているんですね。

長谷川：この時期の映画で、シネフィルとかにも認められている作品っていうのは、『天才マックスの世界』と『ハイスクール白書 優等生ギャルに気をつけろ!』=“Election”、ですよね。この2本の監督は、今ではいわゆる一般映画のトップクラスの監督になっている。でもこの『ビヨンド・クルーレス』の監督はあえてスルーしているんですね。『天才マックスの世界』は画だけは使われていましたけど、でも語らない、みたいな（笑）。

（※『天才マックスの世界』=ウェス・アンダーソン監督／『ハイスクール白書 優等生ギャルに気をつけろ!』=アレクサンダー・ペイン監督）

山崎：そう。「そんなみんなが知っていることなんて言うてどうする」というのがすごくあって。でも彼が推していた作品は、私たちも好きな映画ですね。『ジンジャー スナップス』とか。

長谷川：あれカナダ映画なんですかね。

山崎：そう、カナダ映画でアメリカじゃないので、反則ではあるんですけど。

長谷川：『ハイスクール U.S.A』で、アメリカ映画じゃない映画が2本あって、その1本が『ジンジャー スナップス』なんですよ。

山崎：もう1本はなんでしたっけ？

長谷川：もう1本は『グローイング・アップ』。イスラエル映画なんです、実は。

山崎：じゃあ、本編で触れたカナダ映画は『ジンジャー スナップス』だけだった。この作品はたぶん大きいレンタル屋に行けばDVDが手に入るかも知れない……

長谷川：SHIBUYA TSUTAYA で何年か前に借りて見直した記憶があるから、まだあるかもしれない。

山崎：見たことがない人にはぜひとも見て欲しい。オープニングが本当に素晴らしい。それでちょっと心を奪われてしまう。たぶん学園モノのオープニングでは3本の指に入る。

長谷川：どういうオープニングかっていうと、主人公のフィッツジェラルド姉妹っていうゴスの姉妹がいるんですけど、彼女らの趣味が死体コスプレで写真を撮り合っているんですよ。みんな美しく死んでいるんですね。姉妹がね。

山崎：それをバンバン見せていく。

長谷川：モンタージュで見せて「おお!」っていうね。

山崎：あれは今見てもすごいグッとくるようなシーンじゃないかなとは思います。あとは『バブル・ボーイ』ですね。わり

とジェイク・ギレンホール・ファンは黒歴史にしちゃう人が多い作品なんですけども……。

長谷川：ギレンホール本人は『バブル・ボーイ』は気に入っているみたいなんですけど。

山崎：すごく良い人ですよ。ジェイク・ギレンホールはそうではないんですけど、青春映画を自分の黒歴史にしちゃう俳優ってというのはものすごく多い。

長谷川：ヒース・レジャーとかね、残念ながらね。

山崎：でもその気持ちはわからないでもない、私は。見てくれればわかると思うんですけど、（学園映画っていうのは）俳優一人一人の個性とか技量とかっていうよりも、その時期特有の“何か”っていうのを見せる映画なので、どこかで代償を払わなくてはいけない、犠牲にならなければいけないところがある。だからA級でいたいのために、こういう映画には出ないっていう俳優はいっぱいいるんですね。

長谷川：学園映画の場合わりと型があって、型に入って演じるようなところがあるじゃないですか。俳優はそれをちょっと後で見て、「俺じゃなくてもよかったんじゃないの?」みたいにも思ったりするのかもしれない。

山崎：それでも学園モノに出してくれるとありがたいと思う。今日『タナーホール』が上映されていたんですけど、ルーニー・マーラとかブリー・ラーソンも、ああいう女子寮モノが1本あって良かったなって。のちに彼女たちが出た映画からすると、ちっちゃい作品だけれど、それでも女子寮を抜け出してお祭りに行くとか、女の子同士で体育館でダンスを踊るっていう映画に1本出たおかないと。ルーニー・マーラが珍しく……

（※2016年10月、青春映画学園祭にて『ビヨンド・クルーレス』と同日・同会場で『タナーホール』も上映された）

長谷川：ルーニー・マーラがまだ人間だった頃ってことですよ（笑）。

山崎：ルーニー・マーラが人間時代の傑作、隠れた作品。で、いつかこういう作品に出ていたことが良かったと思える日が来るって思うんですよ。ジェイク・ギレンホールは『バブル・ボーイ』も好きだし、自分の代表作は『ドニー・ダーコ』ってずっと言っている。

長谷川：まだ言ってますよね。

山崎：あとキルスティン・ダンストもちゃんと自分の代表作の1本に『チアーズ!』を入れているという。

長谷川：なんか「CUT」ではね、『チアーズ!』を代表作と言っているところだけが切られているっていう衝撃的な編集が昔インタビューで行われていて、激怒した。

山崎：そうなんですか（笑）。

長谷川：同じ元のやつを英語で読んでいたので、『チアーズ!』が抜けていたんですよ。まあそういうことがあるんですよ、世の中。

山崎：そうですね。でも200本、頑張って集めて、端の端まで見ていて、こういう喜びはものすごくよくわかるし、ジャンルっていうものは、すごくダメなものも、良いものも同じように愛せない、ちょっとこういう映画は撮れない。

長谷川：そうですね。学園映画ってものの自体を愛せないとダメだっていうことはありますね。でも見てて思ったのはやっぱり、ティーンムービーっていうのは、みんなのティーン心に訴える映画じゃないですか。だから鏡みたいになっていて、どういものが好きかって語ることは、自分自身を語るところがある。で、『ビヨンド・クルーレス』はすごく暗い(笑)。やっぱりこういう映画が心に残るっていうのが……。

山崎：そうですね。あれほど明るい映画がありながら、どちらかというところの監督が今、まあ彼自身がどういうパーソナリティなのかかわからないですけど、暗い側面に気持ちがいつている時期で。

長谷川：確実に惹かれてますよね。

山崎：気怠げで、ちょっとやるせない青春のっていうのが、『ビヨンド・クルーレス』にはある。

長谷川：また、フェアルーザ・パークのナレーションが、すごいローテンションでね、ひたひたと話す感じなんですよ。

山崎：でも彼女をナレーションに選んだっていうところは、とても愛を感じる。

長谷川：『ザ・クラフト』の彼女ですからね。

山崎：ちなみに『ザ・クラフト』を見たっていう人は?……あ、少ない……。

長谷川：『ザ・クラフト』は見たほうが良いと思いますね。

山崎：なんでかって言うと、あれも10年かけてクラシックになった映画なんです。アメリカのティーンの子のTumblrとか見ると、ものすごい引用されていて。裏『クルーレス』みたいな感じになっているんですよ。

長谷川：アメリカではザ・スミスの代表曲って「ハウ・スーン・イズ・ナウ」なんですけど、それは『ザ・クラフト』のおかげって言っても過言ではない。

山崎：だから「ハウ・スーン・イズ・ナウ」、ザ・スミスっていうのが本当に青春のテーマ曲になったっていうのは、みんなジョン・ヒューズだっと思ってはいるんですけど、たぶん90年代から。

長谷川：うん。そうそう。

山崎：90年代から映画が、そうしていった。80年代にあたかもアメリカのティーンがみんなザ・スミスを聴いていたかのような幻が90年代を通して築かれていったところがありますよね。

長谷川：そう。ジョン・ヒューズの映画って実は異常な映画だったんですよ。あんなUKモノばかりしか流れないティーンムービーなんて当時他には存在していないので。

山崎：そうですね。そしてそれが結果としてすごく歪んだ形で残って80年代の文化系っていうのはザ・スミスとかジョイ・ディヴィジョンとかザ・キュアーを聴いていたとかいう、幻想が作られてしまった。

長谷川：その結果アメリカの今若手バンドって、イギリス以上に80年代の英国バンドに影響された感じの音楽性を持つバンドが多いですもんね。

山崎：映画とか小説の中で描かれる80年代もすでにそういう風に変容してしまって、『エレナーとパーク』(レインボー・ローウェル著/三辺律子訳 辰巳出版)っていうレインボー・ローウェルのYA小説があるんですけど、あれが80年代で、LAでもニューヨークでもないのに文化系の男の子たちがザ・スミスとかを聴いているっていう。あと最近では……

長谷川&山崎：『ストレンジャー・シングス 未知の世界』ね。

山崎：趣味の良い兄貴がスミスを聴いている。

長谷川：インディアナ州の高校生が83年の時点でザ・スミスを聴いてるのおかしいだろ(笑)って言いたいところはあるんだけど。

山崎：それは学園モノで変容していった過去なんですよ。それはジョン・ヒューズの映画だけではそうはならなくて、90年代のこれだけの作品群が、ザ・スミスっていうのをサブリミナルに推したところがすごくあった。

長谷川：ありますね、うん。

山崎：たぶん『ビヨンド・クルーレス』で語られている映画っていうのは、ほとんど見るはずだと思うんですけど、なんか「懐かしいな」とか当時の印象っていうのはありますか?

長谷川：そうですね。やっぱり記憶に残っているっていうのは、『バブル・ボーイ』もそうなんですけれども、『アイドル・ハンズ』が超懐かしかったですね、個人的には。

山崎：そうですね。『アイドル・ハンズ』っていうのは男の子の左手が乗っ取られてしまって、勝手なことをしてしまうという映画で『ビヨンド・クルーレス』ですごいフィーチャーされていたんですけど。

長谷川：あれを見たとき自分は単なる“ハッパ”っぽい映画で、性欲のメタファーとかそういう発想が何も出来なかったので(笑)。やっぱり見る人によって如何に映画っていうのは

違ってくるのかっていうのが、面白かったですね。

山崎：『アイドル・ハンズ』は、ソニーの「ニュー・パワー・ジェネレーション」っていう言葉をたぶん今は誰も覚えている人はいないと思うんですけど……

長谷川：ソニーの「ニュー・パワー・ジェネレーション・キャンペーン」を覚えてる方いらっしゃいますか（笑）？

長谷川&山崎：あ、いた！ 素晴らしい（笑）！

山崎：4人いました！ いや、あったんですよ。それはね、ソニーが2000年くらいのときに、日本では有名じゃない若手が出演している青春映画とか、ちょっと小さい作品をまとめて売り出したときがあって、今の新宿のピカデリーがあったところにすごい小さい映画館があって、さらにその中で一番小さい……

長谷川：20人くらいしか座れない映画館があったんですよ。

山崎：そこで捨て公開をやって。

長谷川：3本やったんですよ。

山崎：1つがダグ・リーマン監督の『go』で、もう1つが『ビヨンド・クルーレス』にも入っている『ハード・キャンディ』、でもう1本がイギリス映画の『ヴァーチャル・セクシュアリティ』だったんですよ。

長谷川：そうそう。その作品も画面だけ使われてましたよ。

山崎：それを見たって人は？ あ、3人いる。

長谷川：一緒の日に見ましたね、私もたぶん（笑）。

山崎：それで『アイドル・ハンズ』と『待ちきれなくて…』は、その「ニュー・パワー・ジェネレーション・キャンペーン」のビデオスルー部門だったんですよ（笑）。

長谷川：なんで『待ちきれなくて…』の方がスルーになったんだっていうのはありましたけどね（笑）。

山崎：でもまあ、『ビヨンド・クルーレス』で『アイドル・ハンズ』がドンって出てきたのは面白かったし、あと私が今回『ビヨンド・クルーレス』を見て、「なるほど、こういうことを考えるのか」って思ったのは、『ジーパズ・クリーパズ』と『ユーロトリップ』に監督はホモフォビアと潜在的な同性愛志向を見出し出して……

長谷川：まったくそんなものを自分は見出さなかったですね（笑）。そこはとても面白かった。

山崎：そう。私たちの中には無い要素だったので、見られなかったということもあるし、彼（監督）の中ではそれらの映画はそういう物語だったことですよ。

長谷川：たまたまそういう時期にそういう映画を見て、見出したっていうね。

山崎：だから、たぶん『ビヨンド・クルーレス』で語られている映画って他の人が見たら、全然違う文脈かもしれない、というところがありますよね。

長谷川：そこがやっぱりティーンムービーなんじゃないかなあと思いますね。

山崎：それはたぶん作り手っていうことにも関わってきていて、見ればわかる通り、実は青春映画っていうのは、特にアメリカを舞台にした青春映画っていうのはフォーマットが決まっています、色んなお約束事があるんです。何本も引用されている“勝ち組”がロッカーの並ぶ廊下をスローモーションで歩くシーンとか。大体3人くらい子分を従えて。そこに笑い声や、音楽が鳴ってたりして、なにをしゃべってるのかわからないっていう。

長谷川：なにかしゃべっているんだけど、BGMで聞こえないんですよ。

山崎：「サタデー・ナイト・ライブ」ではそれを呪いがかかっているっていう設定のコントで一回バカにしている、高校生たちが廊下を歩こうとするとなぜかスローモーションにしかならないっていう。

会場：笑

長谷川：人力でやるんだよね。

山崎：人力でみんなスローモーションをやっていて、アンディ・サムバーグがトイレに間に合わないとか、そういうギャグをやってたんですけど、それぐらい有名。あとプールのシーンとかいくつも約束事がある。決まってるはずなんですけど、それを誰が撮るかってことによって、そして、どの世代の俳優が演じるかってことによって色んなことが変わってくるジャンルなんですよ。そこが青春映画の面白いところで、かつ古くならないところ。なんでかっていうと、作り手たちが自分のストーリーを持ち込むんです。そういうのはありますよね。

長谷川：それはありますね。半自伝映画がこんな多いジャンルはほかにないだろうっていうところがありますからね。

山崎：いかにも商業的に作られているものにさえ、監督とか脚本家が自分のカケラを入れてしまうところがある。『ザ・クラフト』も実は公開当時はそんなに大きな作品ではなかったけれども、10年経ってハリウッドでも認められたので、この間10周年でオーラル・ヒストリーの記事とか『ザ・クラフト』の功績みたいなもの……

長谷川：10周年じゃなくて、20周年だよ（笑）。

山崎：あ、20周年でした、ごめんなさい（笑）。そしたらもう監督とか脚本家とかがインタビューで半泣きで語っていて、「当時の俺たちが『ザ・クラフト』に込めた思い！」みたい

なものを。

長谷川：本当に思ってたのかな（笑）？

山崎：言ってみればバカっぽい映画なのに、当時みんなが泣きながら構想を話したっていう。

長谷川：『ビヨンド・クルーレス』で引用されていた、アフリカ系の女の子をバカにして、禿げちゃう金髪の子、あの人、ベン・スティラーの奥さんのクリスティーナ・テイラーですかね。

山崎：そうですね。

会場：（驚）

山崎：当時、26、7歳だったのが高校生役をやるなんて良い度胸だったと思うんですけど（笑）、頑張ってたね。

長谷川：ベン・スティラーが彼女と結婚したって聞いたときは、超違和感があった。あんなイヤな女となんでスティラーが、みたいなの。なんか役柄と混同してて（笑）。

山崎：あのときの彼女は、たぶん90年代、『ビヨンド・クルーレス』期の学園映画の3本の指に入る悪役（笑）。だからヒドい、恐ろしい目にあっても誰も同情しないっていう……良い役でしたね。ある意味ね。

長谷川：それだけ上手く演じていたってことなんですけどね。

山崎：俳優っていうことで言うと、この時期に推されていた人たちがたくさん出てきて、それだけで私なんかからすると懐かしいなって思ってしまう。

長谷川：『アイドル・ハンズ』見て、デヴォン・サワ時代があったなって思っちゃって。

山崎：デヴォン・サワっていう名前をちゃんと知っているって人？ あれー少ない！

長谷川：少ないですね（笑）。あれだけ栄華を誇った……

山崎：デヴォン・サワって、だからこういう映画を……

長谷川：だって『アイドル・ハンズ』にサブで出てるセス・グリーンはまだ生きてるし、エルデン・ヘンソンに至っては今ネットフリックスの『デアデビル』で人気者ですからね。ジェシカ・アルバは最初から安泰だったし。

山崎：でもデヴォン・サワって、35、6歳のアメリカの女性にとっては「私の初恋」って思う人がとても多い俳優で、実写版『キャスパー』で、キャスパーが一瞬だけ人間になるシーンを彼がやっていて。その次もう一回、クリスティーナ・リッチとかギャビー・ホフマンが出た青春モノの『Dear フレンズ』でも彼が相手役で、この時期は、本当にデヴォン・サワは飛ぶ鳥を落とす勢いだったっていう。

長谷川：そうそうそう。

山崎：最近だと、その世代が大人になってやっているウェブマガジンとして HelloGiggles っていう……

長谷川：ズーイー・デシャネルが始めたウェブマガジンですね。

山崎：そこらへんの世代の人たちはこの頃のことを語っている。例えば『ドーンズ・クリーク』というのもすごく大きなトピックスだった。TVドラマだから『ビヨンド・クルーレス』では出てきませんが、で、誰かのライターが、「私は確かに『ドーンズ・クリーク』ではジョシュア・ジャクソンが好きだった」と。「(ジョシュア・ジャクソン演じる) ペイシーが好きだったし、今にも実家の部屋にはポスターが貼ってある」と。「でもペイシーはそうはいつでもテレビでそれなりに良いキャリアを築いたから、デヴォン・サワのファンより私はマシなはず！」っていうようなことが書かれていて、デヴォン・サワはそんなことになってたのかっていうのは、すごく思うんですよね（笑）。あと『洗脳』っていう映画があって。

長谷川：主演はジェームズ・マースデンなんですよ。まだ頑張っているどころか、いま全米で話題の『ウエストワールド』でメインを張っていますからね。

山崎：あとケイティ・ホームズ。あのときわりと、主役よりもオイシイ役を演じてて、「この子来るな」って思って来なかったのがニック・スタール。

長谷川：そうなんですよ。みなさん、ニック・スタール覚えてます？

山崎：あ、歳が上の方の人たちはちょっと覚えてますね。

長谷川：あの『ターミネーター3』でジョン・コナーを演じた人って言えば、覚えてますよね。

山崎：そうですね。呪いがかかっちゃった。あとヴィンセント・カーシーザーですね。彼の代表作には『マッドメン』があるんですけど、この頃はすごい少女漫画から抜け出てきたみたいな男の子だった。あの頃、推されてたのはマイケル・ピット、ニック・スタール、ライアン・ゴスリングかな。

長谷川：ほぼ同時に推されてたんですよ。

山崎：けど、結局ライアン・ゴスリングしか残らなかったっていう。

長谷川：まあマイケル・ピットは地味に頑張っただけですね。

山崎：本当にこのジャンルを追っかけていると色んな若手が推されて、行くかと思ったら行かなかった人もたくさんいて、この時期でいうと『ビヨンド・クルーレス』にもちょっとしか出てこなかった、アグネス・ブルックナーっていう女の子がいて。相当推されていて、ニュー・スター特集なんてやると彼

女だけ見開きで2ページ取ってたりしてたんですけど。その後どうなったのかと思ったら、実録アンナ・ニコル・スミスみたいな再現ドラマに主演していて、ちょっと悲しかった。

長谷川：あとミーナ・スヴァーリとか。

山崎：若いスターを消費するジャンルでもあるんですよ。それはちょっと怖い。だからヒース・レジャーみたいに距離を置いたり、黒歴史だからって言い捨てる人もいるのは分かるんですけど、青春映画は、あとあと効いてくるんですよ。

長谷川：そう。良い映画に出るまで。それを見て感動した人々が映画監督になって、いつかは助けに来てくれるんですよ。

山崎：その通りですね。

長谷川：その現象が今起きつつある。色んなところで。

山崎：今だとクリスチャン・スレーターとウィノナ・ライダーとか。

長谷川：『ヘザース／ベロニカの熱い日』組が、今テレビで劇的な復活を遂げていますからね。

山崎：しかも彼らは明らかに『ヘザース／ベロニカの熱い日』のときの役を踏まえた……

長谷川：ウィノナは『ヘザース／ベロニカの熱い日』での、あのまんま地方都市で腐っていったら、『ストレンジャー・シングス 未知の世界』のメンヘラ母みたいになってたはずだし、「革命だ、革命だ」ってクリスチャン・スレーターがずっと言い続けてたら、『MR. ROBOT/ ミスター・ロボット』のオヤジになっていたはず。

山崎：ああいう作品を見ると、ちゃんと若いときに若い映画に出ているってすごく大事なことだと思っています。若い人が若い映画の良い映画に出て、かつ、なんて言ったらいいのかな……それを否定しちゃダメっていう。まあウィノナはわりと否定しがちなところもあったんですけど。

長谷川：でも『ヘザース／ベロニカの熱い日』は否定してないでしょう。

山崎：『ヘザース／ベロニカの熱い日』は否定してない。でも『悲しみよさようなら』をどう思っているのかはわからない。

長谷川：確かにね。

山崎：ただ、彼女ってみんな同じ役なんですよ。過去のティーンムービーでの役柄が大きくなったような役を今の彼女がやっているの、やっぱりティーンムービーっていうものにきちんと出ていて、同じ年頃の人たちに訴えるっていうのがどんなに大事か、あるいは下の世代に訴えるのがどんなに大事かって思いますね。それはキルスティン・ダンストにもすごく言えることで、『FARGO/ ファーゴ』のシーズン2で、彼女が久しぶりに良い役をやっているんです。ああいう風にテ

レビドラマのレギュラーで、彼女がドンってやったのは初めてだと思うんですけど、やっぱり彼女だからやっているんですね、それこそ彼女が10代のときに演じていた、中西部の田舎の女の子。

長谷川：『わたしが美しくなった100の秘密』とかね。

山崎：それと、『ヴァージン・スーサイズ』。だから『わたしが美しくなった100の秘密』と『ヴァージン・スーサイズ』、両方があるから、ああいうふうに中西部の田舎から出られなかった、出たいとずっと思っていたのに出られなかった中年の主婦を演じたときにすごい説得力があるし、あれで彼女はエミー賞とかゴールデングローブ賞とかにノミネートされて、ヒース・レジャーも悲劇的な亡くなり方をしたから、彼にとって『恋のからさわぎ』っていう映画がどんな映画だったか、彼自身が知らないで亡くなってしまったというのがすごく悲しいですね。

長谷川：そうですね。

山崎：たぶん『ダークナイト』のジョーカーが自分の代表作だと思っているかもしれないけど、ジョーカーから10年経ったあとに、仕事をくれるのは『恋のからさわぎ』の彼を好きだったっていう監督なんですよ。そしたらそのときに、彼はもう一回ちょっと違う形で輝いたかもしれない、と思うとすごく残念ではありますよね。

長谷川：『ビヨンド・クルーレス』を見て思ったのは、キルスティンの時代だったのに、あんまりフィーチャーされてないってことと、エイミー・スマートが全然出てこないってことですね。それだけが個人的には不満。

山崎：エイミー・スマートはこのときすごい働き者で、裏キルスティンくらいの感じだったんですよ。

長谷川：ただ、その2人ってコメディエンヌなので、『ビヨンド・クルーレス』の監督は、基本的に軽い感じの映画を否定しがちなので、あんまり出てこなかったのかなあって。

山崎：軽くて明るい側面のものっていうのも、青春映画の1つでもあるんですけどね。

長谷川：だって『ザ・クラフト』の監督のアンドリュー・フレミングって人は、その次に撮ったのが『キルスティン・ダンストの大統領に気をつけろ!』でしょ。でもこの映画については表立って語られない、みたいなどころがあるので。だからやっぱり軽い感じの映画があまり語られないのを見ると、「ああ、鏡なんだな」って思いますね。

山崎：なるほど。私たちは自分が見始めたときは大人だったってところがあった。でも1つのジャンルが出来てくるっていうのはすごいエキサイティングだったんですよ。で、私たちはその原型にジョン・ヒューズを見たんですけど、この監督はジョン・ヒューズを排除しているっていうのは、「上の世代にごちゃごちゃ言われたくない」っていう感じが……

長谷川：自分が発見したのだからね。

山崎：でももうちょっと時間が経つと、この監督も考え方が変わってくるかもしれない。

長谷川：それはあるかもしれないですね。

山崎：ジョン・ヒューズっていうのは、自分たちが言い出したって私たちなんかは思っていて、なぜなら本の出版当時はジョン・ヒューズの再評価っていうのはアメリカでは全然まだだったの。

長谷川：まだまだでしたね。

山崎：だけど2010年代まで来て考えると、彼（監督）を無視したいっていう気持ちもよくわかる。ジョン・ヒューズって一体なんだったんだろうって考えたときに、ポピュラー音楽におけるビートルズみたいなところにすごい近いと思う。80年代育ちからすると、「ビートルズがポップソングの元祖なんだよ」とか「ロックの元祖なんだ」と言われると「えっ」という気持ちとかあるじゃないですか。世代的にはわかりますよね？

長谷川：全然わかりますね。

山崎：もうちょっと、それこそデヴィッド・ボウイとか、そういう人たちの方が、自分たちの聴いている音楽の元祖なんだっていう気持ち。でもただ、ジョン・ヒューズっていうのはビートルズだから汎用性もものすごく高く、色んなものが……

長谷川：作り手自身が気付かないレベルで入り込んでいたりしますからね。ジョン・ヒューズの作った文法っていうのは。

山崎：だからジョン・ヒューズってこういうこと言っていないからって、ということでやってみてもジョン・ヒューズの影響っていうのは受けてしまっているところがある。「ジョン・ヒューズはこういうことを語らないから、自分はこういうことを語った」とか「ジョン・ヒューズの映画にはこういう要素がないから自分は持ち込んだ」と言っている時点で、ジョン・ヒューズというものはやっぱり、どこか大きな存在になっている。

長谷川：『JUNO / ジュノ』の脚本を書いたディアブロ・コーディが、エレン・ペイジが演じたちょっとアウトサイダーな主人公とチアリーダーを親友同士の設定にしている、「おお、アンチ・ジョン・ヒューズだな」と思ったんだけど、ジョン・ヒューズが亡くなったとき、ディアブロ・コーディが、めちゃくちゃジョン・ヒューズのファンだったって、カミングアウトしたんですね。今、それをちょっと思い出しました。

山崎：そうですね。ハリウッドに関して言うと、ジョン・ヒューズが死ぬまでジョン・ヒューズという名を認めなかったというところが……

長谷川：なんの賞ももらってないですからね、あの人は。

山崎：だから『ハイスクール U.S.A.』ですごいジョン・ヒュー

ズを推したので、読者の方に、アメリカでもみんなそう思ってたんだって、思った人もいるかもしれないですけど、実はそんなことは……

長谷川：ああ、全然ないです、それは本当に。

山崎：（『ハイスクール U.S.A.』が出版された）2006年の段階ではジョン・ヒューズ復興っていう動きっていうのは1つもなかったですよ。

長谷川：ないですね。『ハイスクール U.S.A.』の元になった「アメリカ学園天国」というネットサイトがあるんですけど、これが1999年なんですよ。で、そのときにアメリカの学園映画で、日本で人気のあったものって『オタンコ学園』と『超能力学園 Z』だったんですね（笑）。誰もジョン・ヒューズなんて言ってなかったです。そっからの、ですからね。

山崎：まあ実はジョン・ヒューズ自体がアメリカで大ヒットしていたかっていうと、そういうことではなくて、後追い世代が……

長谷川：フォロワーが多かったってことなんでしょうね。

山崎：さっきザ・スミスのことに関して、過去がねつ造されるって話をしたんですけど、こういうときに一番売れていた映画がみんなに影響を及ぼすんじゃなくて、結局それを見て、作り手になった人がいるものが、過去において名作としても一度浮かび上がってくるってところがある。

長谷川：それはありますよね。あとそれも時代によってリバイバルっていうか、ワインみたいに寝かしどころみたいな、あとで効いてくる映画っていうのもあるので、それが面白いところかな。

山崎：だから『ビヨンド・クルーレス』もわりと寝かしどころがちょうどいいところの作品を持って来たかなって。

長谷川：なんか「こういう映画持ってくるかあ」とって。

山崎：そこが中々面白い。ただ、このジャンル、懐かしいジャンルではないってところがすごく良いところで、学園映画って本当に必然的に若い監督、若い脚本家、若い俳優たちを必要とするジャンルなので、いつも新しいってところがある。あとジョン・ヒューズ自体が古いか古くないかってことは置いておいて、ジョン・ヒューズが唯一やって、今でもそれは誰もがやるっていうのに、「自分がわからないことは描かない」、「自分というものを反映させて、自分の10代というものを、自分のストーリーというものを持ち込む」ということがありますよね。それによって豊かになっていくっていうジャンルではあるので、それこそ80年代とか、90年代とか、90年代から2004年くらいまでの作品っていうのだと、まだダイバーシティというようなものはそんなになかったし、同性愛者っていうものも、ステレオタイプでしか語られていないっていうところがあったんですけど、またちょっと最近変わってきている。当時『ハイスクール U.S.A.』の最後で取り上げた、「Not Another Teen Movie」というパロディもので、主人

公の友達が黒人なんだけど、もう一人黒人がやってくると、「おい、待てよ。このジャンル、黒人一人までだ」っていうと「そうだったね」って言って退場するっていう。

長谷川：あったね、そういうギャグ。

山崎：で、『ハイスクール U.S.A.』では“Cooley High”、あと『キャント・バイ・ミー・ラブ』の黒人版の……

長谷川：“Love Don't Cost a Thing”。

山崎：そういう作品を推して、「こういう黒い学園モノがもっと出てくるといいね」って言ってたんですけど、ようやくあれから10年以上経って……

長谷川：『DOPE / ドープ』が出てきた。

山崎：『DOPE / ドープ』とか『ディア・ホワイト・ピープル』とか出てきて、ようやく新しい進化を遂げたかなっていう。今でも新しいものがどんどん出てきているから、すごく面白い。この『ビヨンド・クルーレス』で紹介されている作品は2004年のものが最後くらい。『ミーン・ガールズ』が最後くらいだから、それ以降の『スーパーバッド 童貞ウォーズ』とかまだここに来ていない。そういうことを考えると、ずっとずっと面白い作品が作られてきていて、腐らない良いジャンルだな、と思います。常に新しいものが持ち込まれていて、今年は、アメリカでは去年ですけど『DOPE / ドープ』があって、『ぼくとアールと彼女のさよなら』がDVDスルーだけれどもあって、もうすぐ公開のものだと『エブリバディ・ウォンツ・サム!! 世界はボクらの手の中に』も一応学園モノと言える。あとまだ日本に来てないもので言うと、ヘイリー・スタインフェルドの……

長谷川：“The Edge of Seventeen”。

山崎：今予告が出回っているんですけど、これは傑作だという噂ですね。

長谷川：トロント映画祭とかでもかなり褒められていますよね。

山崎：あと来年で言うと……

長谷川：『スパイダーマン ホームカミング』ね。タイトルからしても傑作の感じがしますけれども。

山崎：監督はもちろんジョン・ヒューズを研究しているし、キャストの集合写真が『ブレイクファスト・クラブ』の真似をしていたりして。

長谷川：そうそう。しかも脚本家が『フリークス学園』の弟を演じていた人ですから。

山崎：だから『フリークス学園』的な作品になりそうな予感がすごくある。あれが学園モノの最前線にたぶんなるだろうと。スパイディーもたぶん変わってきますよね。

長谷川：まあだってカノジョ役がゼンデイヤでしょ。そこからしてもうダイバーシティって感じだよな。

山崎：あとはゼンデイヤってだけじゃなくて、ゼンデイヤが明らかにアウトローの女の子の雰囲気があって、他のメンバーがみんなヲタっていう。ヲタ友みたいなのが一緒にいるっていうのが……

長谷川：で、ゼロがいるんですよ。『グランド・ブダペスト・ホテル』のゼロ役のトニー・レヴォロリが。彼は『DOPE / ドープ』にも出ている。

山崎：『グランド・ブダペスト・ホテル』から青春モノの良いものにも出ているっていうので、彼はすごい良いキャリアの構築の仕方をしていますね。

長谷川：これでアートっぽいのがばっかり出ていると、そのジャンル内で、どんどんレベルが下がった映画に出て、消えていっちゃうおそれがあるんですけど、そこは上手いですね。

山崎：今は新しい世代だから、エージェントとか本人の考え方が違うってことでいいんですかね？

長谷川：昔よりもジャンル映画としての評価は高まっていると思う。例えば“The Edge of Seventeen”がトロント映画祭で褒められるなんて、10年前にはなかった。『スーパーバッド 童貞ウォーズ』とかでも映画祭で褒められたなんて記憶は全然ないので、だからそういう評価が、ようやく出来てきたのかなって気はしないでもないですね。

山崎：そうですね。映画祭で褒められる学園モノっていうとガス・ヴァン・サントの『エレファント』とか。

長谷川：えー!! 大っ嫌い (笑)。

会場：笑

山崎：そういうなんか偏った感じだったので、ちゃんと正統派な学園モノみたいなものが出てくる土壌が出来てきたということ。あと一般映画も高校生の描き方が変わってきたなって思ったのが、このあいだ『母の残像』っていうラース・フォン・トリアーの甥が撮った映画を見たんですけど……

長谷川：すごい微妙なところの……

山崎：彼がアメリカで初めて撮った映画で、わりとビジュアルではジェシー・アイゼンバーグとイザベル・ユペールが推されているんですけど、あの映画はイザベル・ユペール演じるお母さんが亡くなったあとの話で、ジェシー・アイゼンバーグじゃなくてまだ高校生の次男が、どちらかという主人公なんです。すごい強烈なお母さんが亡くなって、オンラインゲームが大好きな内向的なキモいティーンに育ったっていう。でもジェシー・アイゼンバーグが大学の先生になって結婚しているの、逃げ切ったとっていて、過去の自分のことを忘れて「お前、学校で銃撃とかやってないよな？」っていうんですよ (笑)。でも、次男は文才があって、自分の思いを散文

調で描いた文章を兄に見せると、兄も感心するんだけど、やっぱり高校生だから、それを憧れているチアリーダーの女の子に渡すっていう。それをジェシー・アイゼンバーグが全力で止める（笑）。

会場：笑

山崎：もう、やめろって。「お前はな、確かにクールなところもあるかもしれないけど、高校っていうのは外向性と社交スキルがこの世で一番求められるシビアな世界なんだ。今は息をひそめて待て」と言われるっていう（笑）。

長谷川：空気を読めないあのレックス・ルーサーが止めるくらいヤバいっていう（笑）。

山崎：そう、そうなんです。親の居ぬ間パーティーから帰る夜明けの道のシーンがあって、それをぜひとも見て欲しいです。ラス・フォン・トリアーの甥にもかかわらず、結果的にジョン・ヒューズオマージュになってしまっている。ナレーションがジョン・ヒューズ映画のとあるところを結果的に、もしかして意識してなかったかもしれないんですけど、引用になってしまっている、と。でもそうなるのは必然だったんです。なぜかっていうと『母の残像』っていう邦題がついているんですけど、原題が『Louder Than Bombs』っていう……

長谷川：ザ・スミスの……

山崎：はい。アメリカ版のコンピレーションのタイトルだったっていうので、北欧の人間でさえ、アメリカの郊外の高校生を描くところになると、ザ・スミスであるとか、ジョン・ヒューズ的なものから逃れられないんだって。そこは良いシーンなので、学園映画ファンにはぜひとも見てもらいたいと思いました。

長谷川：なるほど。

山崎：あと他にになにか期待しているところは？『DOPE / ドープ』とかはうれしかった映画ではないですか？

長谷川：『DOPE / ドープ』はちょっと映画館の数も少なかったんで、リアルタイムで劇場で見た人はあまり多くなかったかも……ぜひとも未見の人も見て欲しいんですけど。いわゆるロサンゼルス圏の荒れたところのティーンの、成績は良いんだけど、ハーバード大学に行きたいと、『ヤング・アダルト U.S.A. ポップカルチャーが描く「アメリカの思春期」』（長谷川町蔵＋山崎まどか著 DU BOOKS）とか、『ハイスクール U.S.A.』とかにも書いてあるんですけど、成績が良いだけじゃアメリカの名門大学は行けないんですよね。エッセーを提出して採点される、と。で、先生から「お前のエッセーは視点が客観的すぎてダメじゃないか」って言われて、「どうしようかなあ」と思っているときに、MDMAと言われる麻薬を捌かなきゃいけないハメに陥る。それとともに自分がどこから来たのかっていうのを再発見していくって話になっていくってことで、進学モノであるとともに、フッド・ムービーでもあるという、合わせ技なところがとっても面白いなって。

山崎：でも向こうでは「黒いフェリスはある朝突然に」って言われ方をすごいされていた。そこらへんはやっぱりイングルウッドっていう地元を3人の子たちがパカパカと駆け回ってよく見せていたっていうところも。

長谷川：それはあるのかもしれないですね。3人でグルグル、グルグルね。

山崎：そう。ロス映画って普通は車だけれども、高校生だから自転車だっていう（笑）。

長谷川：免許持ってないんだよね、誰も。

山崎：それがすごい効いていて、結果的に高校生らしさっていうものが出た。で、イングルウッドの高校生モノなんていうのが出来るなんて10年前には思ってもみなかったの。かつ、フッド・ムービーの要素っていうのが大きいけれども、同時にちゃんと学園モノでもあるってところも良かった。

長谷川：まあ、いわゆる音楽、ヒップホップ好きから見ても、学園映画好きから見ても、とても素晴らしい映画。

山崎：あと主演の3人が全員出世しそうなので。

長谷川：主人公のシャメイク・ムーアはバズ・ラーマンの『ゲッドダウン』で、シャオリン・ファンタスティック役で、今華々しく活躍している。

山崎：『ゲッドダウン』見てるって人は？

会場：……

長谷川：見て！ 全員見て。

山崎：まあ『ゲッドダウン』も言ってみれば学園モノですよ。

長谷川：そうなんです！ ティーンが頑張る話ですからね。

山崎：シャオリン・ファンタスティックって、たぶん伝説になるだろう存在をシャメイク・ムーアが演じていて、もう一人、主人公をやっている子が『ペーパータウン』の脇の子、ジャスティス・スミスなので、学園映画の子たちの出世作なんですよね。

長谷川：あと『DOPE / ドープ』でレズビアンの子の役を演じていたキーアージー・クレモンズが映画版『ザ・フラッシュ』で主演のエズラ・ミラーの相手役なんですよ。エズラ・ミラーもちょっと前までは『ウォールフラワー』だったわけじゃないですか。

山崎：そうですね。だから学園モノを生き抜いてココまで行っているっていうのはありますよね。だからやっぱり今の10代とか20代の若い俳優にも嫌がらずに学園映画に出てほしい。ヘイリー・スタインフェルドちゃんは“The Edge of Seventeen”があつて良かったと思つたし、クロエ・グレース・モレッツは『ネイバーズ2』が学園モノって言えるかなって。

エル・ファニングだけがちょっとそういうのに出ていないって
いう。エルはちょっと違う？

長谷川：エルはクラスにいたら……なんか怖い（笑）。扱い
に困らないですか（笑）？

山崎：むずかしい、と（笑）。

長谷川：なんか巨大なキラキラとした生き物だなあって。

会場：笑

山崎：すごい美人かっていうと、そこはちょっとわからないみたい
な。

長谷川：話が面白いかって言ったら、たぶんあまり面白くない
だろう、と。でも、キラキラ輝いている。ちょっと扱いがむ
ずかしいですよ。まあ『SUPER8 / スーパーエイト』は良かった
ですよ。

山崎：『SUPER8 / スーパーエイト』が広義の学園モノだっ
たということでいいのかな、という。

長谷川：だからそういう映画に出ていると、今華やかな彼女
らが何かに挫折して落ちて、ダファー兄弟（『ストレン
ジャー・シングス 未知の世界』の製作者）がウィノナを救っ
たみたい、助けてくれるかもしれないですね。だから我々の
望みは『ミーン・ガールズ』を見て育った監督が、リンジー・
ローハンを救い出してくれることですよ。

山崎：本当にちょっとね。今一番悲しいと言えばそこですね。
あの……、ね。私たちが夢見ているもう1つの世界では『ラ・
ラ・ランド』はリンジー・ローハンがやるはずだったっていう。

長谷川：エマ・ストーンがやってる仕事が全部リンジーのもの
なんですよ。

山崎：もう1つの世界ではね。

長谷川：『バードマン あるいは（無知がもたらす予期せぬ奇
跡）』とかね。

山崎：そうですね。でもまあ、逆に言うと、デヴァン・サワ
のことも残念だって言っていたけれど、『アイドル・ハンズ』
とかを見てた人たちが……

長谷川：オマージュを捧げた役で救い出してくれるかもしれ
ない。

山崎：リンジーもぜひともそういうところで。すでにヒラリー・
ダフが『リジー & lizzie』特需みたいなもので、やっていっ
てるところってあるじゃないですか？

長谷川：そうそうそう。あの人、紗栄子みたいな感じなんで
すかね、アメリカで。インスタで写真を投稿すると、昔のファ
ンが「相変わらず可愛い！」とかすごい書き込みしてくれるん

ですよ。

山崎：だからあの人を推すものって売れるしね。アメブロみ
たいな商法で（笑）。

長谷川：潤ってますよね。あとそういえば、リース・ウィザ
ースプーンが、サザンテイストの、でも結構安いドレスみたい
なもので荒稼ぎしてるじゃないですか。

山崎：あの、リース・ウィザースプーンのドレイパー・ジョ
ーンズってブランドがあるんです。今インスタでは、大体彼女
はそれを着て写っているっていう。なんか南部のケイト・ス
ペードみたいな感じ。

会場：笑

山崎：バッグに「ドリー・パートンならどうする？」とか書い
てある（笑）。でも、すごいエル・ウッズ感のあるリース・ウ
ィザースプーンですよ。

長谷川：リースって一時期、オスカー獲ったあと迷走してた
けど、最近の彼女のインスタを見ると、めっちゃエル・ウッズ
（『キューティー・ブロンド』シリーズの役名）なんですよ。
「私はエル・ウッズなんだ」っていう意志がすごい炸裂してて
（笑）。

山崎：リースのリブランド会議ってというのがあったんじゃない
かって私たちのあいだで言われていて。リース・ウィザース
プーンをもう一度輝かせるキーワードを5つ挙げようってこと
になったときに、誰かが「エル・ウッズ」って言って、決まっ
たっていう（笑）。もうだからインスタを見てください。

長谷川：超笑えますよ。

山崎：『キューティー・ブロンド』の公開15周年で、「エル・ウ
ッズの衣装全部着ますキャンペーン」があったっていう（笑）。
今はアカデミー賞を獲ったことなんてなかったかのように、エ
ル・ウッズだっていう。

長谷川：むしろエル・ウッズ推し（笑）。

山崎：これから彼女がやる役はエル・ウッズっぽいものがど
んどん入ってきている。逆に言うとリースは頭の良い人だか
ら、学園モノの自分をもう一度引っ張ってきた。

長谷川：それで人気もまた取り戻しているところがある。あと、
どうでもいいですけど、ドリュー・バリモアが今ワインを作っ
ているっていう（笑）。

会場：笑

長谷川：バリモア・ワインってというのがあってですね、すん
ごい飲みたいんですけど、日本に入ってきてない。どんなワ
インなんだろう（笑）。

山崎：ドリュー・バリモアはこの頃に学園モノでリブランドし

た人なので。

長谷川：『スクリーム』でね。

山崎：『スクリーム』と『25年目のキス』があって、今のドリューになった人なので。というわけで学園映画には出ておけ、ということで。どんな若手も。あとぜひともみんなに学園映画を見てほしいし……『ビヨンド・クルーレス』で挙げられているものの中では、どんなものを見てほしいですか？

長谷川：うーん、ちょっと考えるから待ってて（笑）。

山崎：じゃあ私は『ビヨンド・クルーレス』というわりに『クルーレス』があんまり出てなかったのも、まだ『クルーレス』を見たことがない人は『クルーレス』を。あとですね、『プッシーキャッツ』！

長谷川：あ、『プッシーキャッツ』ね。超良い映画。じゃあ僕は『キルスティン・ダンストの大統領に気をつけろ!』で。

山崎：では『キルスティン・ダンストの大統領に気をつけろ!』と『プッシーキャッツ』はぜひ見てくださいということで、今日はここで終わりにしたいと思います。

長谷川&山崎：今日はどうもありがとうございました。

PROFILE

山崎まどか（やまさき・まどか）

コラムニスト。

主な著書に『女子とニューヨーク』『オリーブ少女ライフ』。
共著に『ヤングアダルト U.S.A.』。翻訳書にB・J・ノヴァク『愛を返品した男』レナ・ダナム『ありがちな女じゃない』。

長谷川町蔵（はせがわ・まちぞう）

文筆業。

著書に「21世紀アメリカの喜劇人」「聴くシネマ×観るロック」
共著に「ヤング・アダルト U.S.A.」（w/ 山崎まどか）「文化系のためのヒップホップ入門」（w/ 大和田俊之）